

機関番号：11302

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2007～2010

課題番号：19530577

研究課題名 (和文) 幼児期の向社会的行動と社会化に関する発達の検討

研究課題名 (英文) Development of prosocial behavior and socialization on preschooler

研究代表者

伊藤 順子 (ITO JUNKO)

宮城教育大学・教育学部・教授

研究者番号：10331844

研究成果の概要 (和文) : 3歳入園児を対象に、入園前年度から卒園年度の4年間、家庭、教師、仲間という環境の中で、幼児が自己を主体としていかに向社会的行動を学習するかを検討した。入園前の母親の統制傾向は向社会的行動に、応答性傾向は攻撃行動に関与し、これが、環境移行期の仲間との相互作用に個人差と関連している。環境移行期においては、困窮場面における自発的援助が仲間関係の形成に関与している。教師によって社会的スキルの「気になる側面」が異なりこれが子どもとの相互作用、仲間関係に反映されていた。環境移行期における「教師-子どもの関係」「仲間関係」といった人的環境は、社会的スキルの獲得に重要な役割を果たしていることが示唆された。

研究成果の概要 (英文) : This study is considered how infants learn prosocial behavior based mainly on oneself in the environments, which are the home, the teacher and their company in finishing fiscal year from the entrance previous year targeted for the kindergarten child for 4years. The mother's control tendency before entrance participates related prosocial behavior and the mother's response tendency related offensive behavior, and this relates to the individual variation in the interaction with the company of an environment transitional period. Since putting it in the environment transitional period, voluntary prosocial behavior in sad situations effected formation of peer relationship. This was different in "worrisome side" of a social skill depending on teachers, and was reflected by the interaction with teacher-children and peer relationship. The thing by which the human environment such as "relations of a teacher-children" "peer relationship" that an environment transitional period can put it plays the role important to acquisition of a social skill was suggested.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
平成19年度	500,000	150,000	650,000
平成20年度	500,000	150,000	650,000
平成21年度	500,000	150,000	650,000
平成22年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：パーソナリティ 社会性 向社会的行動 環境移行 幼児期 発達

### 1. 研究開始当初の背景

子どもは向社会的行動を身につける潜在的可能性を持っているがその行動自体は学習されなければならない。従来の研究では、向社会的行動の獲得・発達を支えるメカニズムが検討された結果、家庭環境、親子の相互作用の質、しつけ技法、帰属教示等が向社会的な規範の内在化に影響を与え、子どもの行動を規定していることから、向社会的行動の楽手における家庭での社会化の重要性が示唆されてきた。さらに、Eisenberg(1986)は、向社会的道徳推論の発達と母親の養育態度関連を基に、社会化の視点を取り入れた向社会的行動の発達モデルを提唱し、これまで数多くの研究で実証されている。しかしながら、子どもの社会化の担い手は、家庭のみならず、地域社会、学校、教師、仲間等多岐にわたっている。これまでの向社会的行動の発達研究、特に年少の子どもを対象とした研究では、家庭での社会化が偏重される傾向にあり、家庭以外の社会化の担い手が子どもの行動にどのような影響を与えるか、いまだ体系的な研究はなされていない。

### 2. 研究の目的

本研究では、家庭、教師、仲間という環境の中で以下に幼児が向社会的行動を学習しているかを明らかにし、向社会的行動の発達における「個×環境」モデルを構築することである。

そのために以下の2点に着目する。①子どもの「個」の発達をみるためには、発達段階はもとより、文化的、社会的文脈を知ること、つまり、子どもが日々どのような環境で活動し、学習しているかという文脈を考慮することが重要となってくる(Selman, 2002)。そこで、本研究では、「自己」を媒介とした向社会的行動の変容モデルに、家庭、教師、仲間といった環境要因を取り入れ、環境との相互作用の中で、幼児が事故を主体として以下に向社会的行動を学習しているかをあきらかにする。②子どもの行動は、過去から現在、現在から未来という連続性の中で変容する、よって、向社会的行動の発達を解明するため

には、「前発達段階(e.g. 5歳時)の仲間との相互作用が、いかに次の発達段階(e.g. 6歳時)の向社会的行動に関与しているか」、「あるいは「前発達段階の向社会的行動傾向が、いかに仲間との相互作用に関与しているか」という時間的連続性に視点を当てた研究が必要である。一方、幼児の向社会的性の個人差に目を向けると、仲間が存在するという環境の中で、援助する、援助されるという経験から、互惠的仲間関係を築き向社会的行動を楽手する子どももいれば、こうした互惠的仲間関係の形成過程に組み込まれない子どももいる。つまり、幼児期を通して仲間から援助を受ける機会、仲間を援助する機会がほとんどなく、次第に集団から孤立する子どもも存在している。従来の研究結果(Dunn, Cutting, Fisher, 2002)を踏まえるとこうした子どもは児童期以降の仲間関係や学校生活で不適応を起こす可能性が高いことが示唆される。こうした傾向にある子どもに対しては、仲間のみならず、家庭、教師とのかかわりといった他の相互における特徴を検討し、どの段階にリスク要因が存在したのか解明する必要がある。そうしたリスク要因が明らかになれば、向社会的行動の発達を保障するような個に応じた援助を検討することも可能になる。そこで、本研究では、幼児期の社会化の過程を、養育態度、親子の相互作用の質、遊び場面での仲間との相互作用スタイル、幼児が認識する仲間関係、教師との関係から、多面的・階層的にとらえ、向社会的行動との関連を検討していく。

### 3. 研究の方法

本研究では、家庭、教師、仲間という環境の中で、幼児が「自己」を主体として以下に向社会的行動を学習しているかを明らかにするために、入園時期が異なる2群の幼児を対象とし、入園前年度から卒園年度までの期間、縦断調査を行う。第一縦断群(C1)はH20年度3歳入園予定の幼児とし、入園前年度のH19年からH22年までの4年間、第二縦断群(C2)はH21年度4歳入園予定とし、入園前年度のH20年からH22年までの3年間調査する。

Table 1 縦断群の調査時期

	H20年度 3歳	H21年度 4歳	H22年度 5歳
第一縦断群 (C1)	● 入園	—————	—————
第二縦断群 (C2)	—————	● 入園	—————

注 ● 「家庭での社会化」に関する調査実施時期  
 ——— 「仲間・教師との相互作用」、「向社会的性の個人差」、「社会化（到達度）」に関する調査実施時期

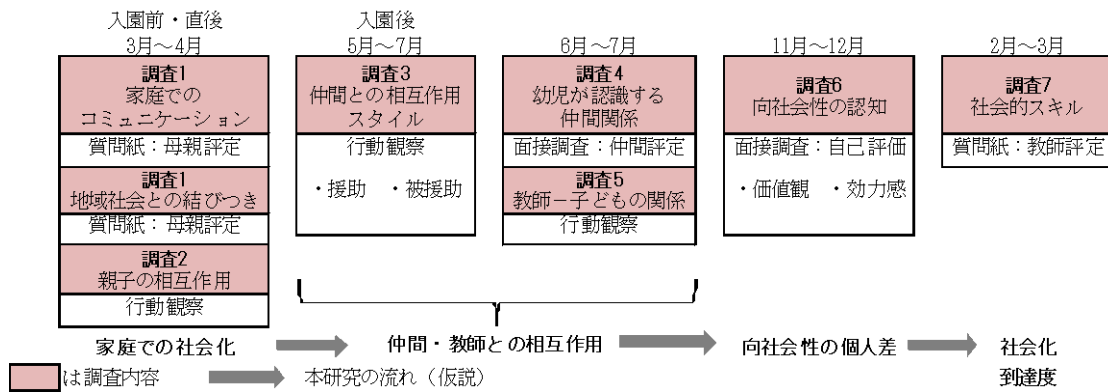


Figure 1 第一縦断群(C1)の調査内容と本研究の流れ

#### 4. 研究成果

入園後の幼児の生活を、家庭から園への「環境移行期」、幼稚園での「適応期」、園から小学校への「移行準備期」の3つの段階から捉え、H19年度は、H20年度入園児の縦断調査（H20年～H22年）のための予備調査を行った。研究1では、家庭から社会への環境移行期にある3歳入園児を対象に、人的環境としての「仲間」「教師」の2つの側面に注目し、幼児の社会的スキルと関連があるか否かを検討した。その結果、保育者ごとに社会的スキルの評定に関して、③協調、④注意・多動、⑤引っ込み思案、の3側面に関して、保育者間の差異が示された。保育者Aは保育者Bよりも、③協調の評価平均得点が低く、④不注意・多動、⑤引っ込み思案の評価平均が高い。これらの結果から、保育者の保育観や発達観によって、子どもの社会的スキルの評価基準が異なることが示された。次に、これら幼児の社会的スキルに関する教師の評価基準の差異が、「保育者－子どもの関係」、「仲間関係」と関連があるか否かを検討した結果、保育者によって、社会的スキル評定と保育者－子どもの関係、仲間関係が異なることが示された。まず、保育者Aに関しては、自己統制できると評価している子どもほど、子どもと保育者の親密性は低い、仲間関係が安定し良好であること、不注意・多動であると評価している子どもほど、子どもと保育者の親密性が高く、仲間から友だちであると認知されていない傾向があることが示された。一方、保育者Bは、引っ込み事案であると評価している子どもほど、子ども－保育者の親密性が高く、仲間から友だちであると認知されていない傾向にあることが示された。以上の結果から、保育者の社会的スキルの評価基準の差異は、保育者－子どもの関係、仲間関係の質と関連していることが示された。保育者によって社会的スキルの「気になる側面」が異なり、これが子どもとの相互作用に反映されている。また、保育者が気になる「社

会スキル」の側面は、仲間関係とも関連しており、環境移行期における「保育者」「仲間」といった人的環境は、社会的スキルの獲得に重要な役割を果たしていることが示唆された。

H20年度は、環境移行期の幼児の向社会性の発達と社会化の過程を明らかにするために、H20年度3歳入園予定の幼児を対象とし、child×environmentモデルを基に、①入園以前の家庭での社会化（養育態度・育児サポート・母子分離）、②仲間・教師との相互作用（仲間との相互作用スタイル・仲間関係・子ども－保育者の関係）、③向社会性の個人差（向社会性についての価値観・効力間）、④年度末における社会化の達成度（社会的スキル）を検討した。その結果、移行期初期に母子分離がスムーズな幼児は、移行期前半（4-13週）で友だちからの攻撃行動が少なく、移行期終期には良好な仲間関係を形成しており、母子関係→仲間関係という移行過程が示された。対人行動に関しては、移行期前半で自発的に友だちの困窮場面に介入し援助を行った幼児は、移行期終期には良好な仲間関係を形成し、向社会的な効力感が高かった。一方、依頼に応える介入は仲間関係や向社会性と関連がないが、教師－子の関係に負の相関があった。以上の結果から、困窮場面における自発的介入と依頼に応える介入は異なる機能を有し、移行期においては、『困窮場面への自発的介入→仲間関係→向社会的な効力感』という社会化の過程が示唆される。一方、移行期前半で攻撃行動が多い幼児は、移行期終期の向社会性（価値観・効力感）は低く、終期で良好な仲間関係が形成されていない幼児は価値観が低いことが示された。以上の結果から、向社会的な価値観と効力感の形成過程は異なり、移行期においては『攻撃行動／仲間関係→向社会的な価値観』という社会化の過程が示唆される。また、保育者は、依頼に応える介入が多い幼児に対して意図的な関わり方をしており、『仲間集団での援

助依頼→保育方針・経営』という環境構成過程が示唆される。

H21年度は、「適応期」の向社会的性の発達と社会化の過程を検討した。具体的には、4歳児クラスの進級児（H20年度3歳入園児）を対象とし、child×environmentモデルを基に、①仲間・教師との相互作用（仲間との相互作用スタイル・仲間関係・子ども－保育者の関係）、②向社会的の個人差（向社会的性についての価値観・効力感）を評定した。その結果、子育て支援状況と社会的行動との関連については、(1)入園前後で子育てに対して周囲から道具的サポートが得られている母親の子どもは、入園後友だちへの援助が多く、攻撃行動が少なく、環境移行がスムーズであり、(2)母親への情緒的サポートの低さは、即時に子どもの社会的行動へは関与はみられないが、適応期の子どもの攻撃行動を高める傾向にあること、が明らかになった。さらに、養育態度・母子関係と社会的行動との関連については、(3)母親の統制（子どもの意思と関係なく、母親が子どもにとってよいと思う行動を決定し、それを強制する傾向）が高い場合、移行期には影響がみられないが、適応期の仲間関係に影響を与え、仲間への援助行動が少ない。(4)さらに、統制が高い場合、移行期には仲間からの援助を必要とするが、適応期では仲間への援助回数が少なく、向社会的な相互作用が芽生えていない。一方、(5)母親の応答性（子どもの意図・欲求に基づき、愛情のある言語や身体的表現を用いて、子どもの意図をできる限り充足させようとする傾向）が低い場合、移行期では友だちへの攻撃行動が多い傾向にあることが明らかになった。以上の結果から、環境移行期・適応期において、子どもが仲間と適切な相互作用が持てないことには、母親の統制の高さ、応答性の低さが関与していることが示唆された。

本年度は、「移行準備期」の向社会的性の発達と社会化の過程を検討し、縦断分析を行った。幼児期において向社会的行動と攻撃行動の出現数、仲間関係調査の結果に年齢差はみられなかった。各年度内、年度間の相関係数を算出した結果、3歳から5歳にかけて各年齢の間に、困窮場面での向社会的行動による改善経験は関連がないことが明らかになった。3歳から5歳にかけて、幼児は、改善できた経験のみによらず、向社会的行動を学習し、相互作用の中で縦断的に獲得していると考えられる。また、3歳から4歳にかけての時期は、無視・拒否（無反応）が多く、向社会的行動と仲間関係との関連もないことから、困窮場面を理解して向社会的行動の方略を学習していく発達の段階であると考えられる。しかし、3歳の頃に困窮場面で無視・拒否（無反応）されていた幼児は、4歳時点でも無視・拒否（無反応）され、攻撃をうけ

るようになった。つまり、3歳で自分の困窮場面に遭遇していた幼児は、4歳になって集団の中で弱者の立場にあることが示唆される。3歳から4歳にかけて仲間関係は安定しておらず、攻撃などの自発的な働きかけで変化していることが窺がえた。5歳で友だちの困窮場面を改善できる幼児は、4歳の頃に被指名が多い幼児であり、同時に他児に対して攻撃をする幼児であった。4歳で友だちに対して無反応であった幼児は、5歳で友だちから無視・拒否（無反応）をうけるようになった。また、4歳で無反応を受けていた幼児は攻撃をうけるようになり、このことから、3歳から5歳にかけて弱者の立場になる幼児が固定化していることが窺えた。また、4歳の頃の困窮場面における態度が、5歳での仲間関係の形成に影響を与えていることが示唆された。教師の社会的スキルの評価基準は、教師－子どもの関係、仲間関係の質に関連していることから、教師によって社会的スキルの「気になる側面」が異なりこれが子どもとの相互作用に反映されていた。環境移行期における「教師－子どもの関係」「仲間関係」といった人的環境は、社会的スキルの獲得に重要な役割を果たしていることが示唆される。

上記4年間のデータを総合的に分析し、幼児期の向社会的行動の発達における「個×環境」モデルを構築中した。今後、モデルについて、多様性の観点から考察予定である。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

①向社会的性についての認知はいかに変容するのか：幼児期から児童期にかけての検討、伊藤順子、幼年教育研究年報（広島大学大学院教育学研究科附属幼年教育研究施設）、査読無、30巻、5-13、2008。

〔学会発表〕（計10件）

①幼児期の自尊感情についての関係論的分析：3歳から5歳にかけての縦断的調査から、伊藤順子、日本発達心理学会第22回大会発表論文集、査読無、536、2011。

②子育て支援環境・母子関係と幼児の社会的行動との関連：環境移行期から適応期にかけての変容、伊藤順子、日本発達心理学会第21回大会発表論文集、査読無、441、2010。

③環境移行期における社会的行動と仲間関係、伊藤順子、日本発達心理学会第20回大会発表論文集、査読無、358、2009。

④環境移行期における適応過程：3歳入園前後についての検討，伊藤順子，日本保育学会第62回大会発表論文集，査読無，85，2009.

⑤幼児期における向社会性の発達と社会化の過程：環境移行期における3歳入園児の変容，伊藤順子，日本教育心理学会第51回総会発表論文集，査読無，440，2009.

⑥幼児期の向社会性の発達に関する質的検討，伊藤順子，日本発達心理学会第19回大会発表論文集，査読無，757，2008.

⑦幼児期における父子・母子の愛着：養育態度・夫婦関係の関連から，伊藤順子，日本保育学会第61回大会発表論文集，査読無，638，2008.

⑧環境移行期の「仲間関係」・「保育者－子ども関係」と社会的スキルとの関連：3歳入園児についての検討，日本教育心理学会第49回総会発表論文集，査読無，伊藤順子，204，2008.

⑨幼児期における向社会性の変容：規範的側面・評価的側面に関する認知の縦断的検討，伊藤順子，日本発達心理学会第17回大会発表論文集，査読無，679.2007

⑩援助すること・援助されることの意味とは：幼児期における縦断的調査から，伊藤順子，日本教育心理学会第49回総会発表論文集，査読無，623，2007.

〔図書〕(計2件)

①親と子のつながりの不思議，伊藤順子，図で理解する発達，川島一夫・渡辺弥生(編著)，福村出版，93-106，2010.

②社会化と向社会的道德推論，伊藤順子，原著で学ぶ社会性の発達，渡辺弥生・杉村伸一郎(編著)，ナカニシヤ出版，86-93，2008.

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等